私たちの主張

横浜市の「三ツ沢公園再整備基本構想（案）」において「新球技場整備検討エリア」とされるエリアは、緑豊かな桜山・自由広場領域です。数万人規模の「新球技場」の建設により、数多くの樹木が伐採されることになります。また、「影響を受ける施設の代替機能の確保」（横浜市）とはいうものの、子どもたちに人気のカルガモやカメがいる現在の池は埋められ、テニスコートの一部、自由広場の全域、野外活動センターなどの施設もこの場所から姿を消すことになります。

神宮外苑をはじめ全国的に樹木伐採が大きな社会問題となっている現在、世界的にも自然環境の保全が求められています。私たちは森林伐採、自然環境破壊を伴う「新球技場」の建設に強く反対し、未来の子どもたちに〈緑豊かな公園〉を残すことを求めます。

【なぜ三ツ沢公園内に？】

市街化が進むなかほとんどの緑地が消滅した横浜市東部において、三ツ沢公園に残る緑はとりわけ貴重です。その貴重な樹木を伐採し、そこに息づく生きものたちの営みを破壊してまで、三ツ沢公園を「新球技場」の建設地とする必然性はあるのでしょうか。起伏のある土地をならし、平地にするためにどれだけのコストがかかるのかも明らかにされていません。

三ツ沢公園は、近隣住民にとっての**憩いの場**です。この公園に数万人規模の球技場が「もうひとつ」建設されれば、私たちの日常の風景は様変わりしてしまいます。この夏の猛暑のなかでも心地良いひとときを与えてくれた木陰。適度な斜面、樹木の間をめぐる**トリムコース**は、散歩やジョギングに欠かせません。**自由広場**は、住宅が密集する近隣地区の子どもたちにとって、思いきり遊ぶことのできる貴重な広場。お年寄りも集い、グラウンドゴルフや体操をしています。桜満開のころ、**桜山**の広場に多くの人が集まり、お花見を楽しみます。秋には紅葉狩り、どんぐり・松ぼっくり拾いなど、四季折々の楽しみがあります。青少年育成のための**野外活動センター**では、火の体験や、仲間と協力しながら過ごす宿泊体験ができます。このような私たちの日常の時間や体験は、替えがきくものではありません。

とくに自然の営みは細やかで繊細なものです。三ツ沢公園の野鳥や草花を観察している人によれば、大樹の伐採や下草の刈り込みに伴い、**三ツ沢公園を訪れる野鳥の数や種類は年々減っている**とのことです。樹木を伐採しても、また別に植えればよい。池を埋めても、またほかにつくればよいという問題ではありません。この豊かな自然風景、生きものたちの営みに触れることのできる公園を次世代に引き継ぐことは、大人としての使命だと考えています。

私たちは「新球技場」の建設そのものに反対しているわけではありません。横浜市内には球技場の建設地として適した土地が他にあるものと考え、横浜市全体を俯瞰しての検討を求めます。

【横浜市の動きについて】

2022（令和４）年 8-9 月におこなわれた横浜市の**パブリックコメント**には 2,946 通の市民の意見が寄せられましたが、「新球技場」建設の賛否を問うものではなく、寄せられた意見に対する回答も「新球技場」建設ありきのものでした。近隣住民への**説明会**も一切ありません。そのため、横浜市の再整備案の存在自体を知らない市民は今も多く、周知されているとはとても言えない現状です。また再整備案には予算規模も工期への言及もなく、**情報公開の透明性**のうえでも問題があると考えます。

2023（令和５）年６月、横浜 FC の親会社が寄附提案を取り下げ、横浜市の計画は白紙になったとの声も一部では聞こえますが、11 月 30 日から 12 月 13 日まで**サウンディング**型市場調査を行っていることから、横浜市がその後も検討を進めていることは明らかであり、私たちは落胆しています。

近隣住民に対して、交通渋滞、騒音等の環境対策に関する説明もない。三ツ沢公園に隣接している市民病院への救急車の通行への支障が本当にないのかという点も疑問です。

さらに、「新しい球技場」には約 100 億円とも言われる巨額な建設費が必要になるにも関わらず、その建設費用の見込みがないまま検討が進んでいることには疑問を呈さざるを得ません。

横浜市は市民の理解を得ている――そう言えるのでしょうか。

【私たちの取り組み】

・横浜市の再整備案の問題点を、特に三ツ沢公園周辺の住民に知ってもらうため、神奈川区・保土ケ谷区・西区の 14 の町、２万を超える世帯に向けて個別ポスティング、並びに署名活動を行っています。

三ツ沢公園周辺の町

区　　名	ポスティング町名	世帯数	小　　計
神奈川区	三ツ沢西町	711	10,903
	三ツ沢南町	1,222	
	三ツ沢東町	868	
	三ッ沢下町	2,544	
	三ツ沢上町	1,713	
	三ツ沢中町	1,793	
	松ヶ丘	1,197	
	沢　　渡	855	
保土ケ谷区	峰沢町	2,120	9,555
	岡沢町	2,078	
	常盤台	3,217	
	鎌谷町	2,140	
西区	北軽井沢	1,146	2,711
	宮ヶ谷	1,565	
		総世帯数	23,169

（世帯数：2023 年４月-9 月横浜市発表による）

厳格な環境制約の枠内での開発を

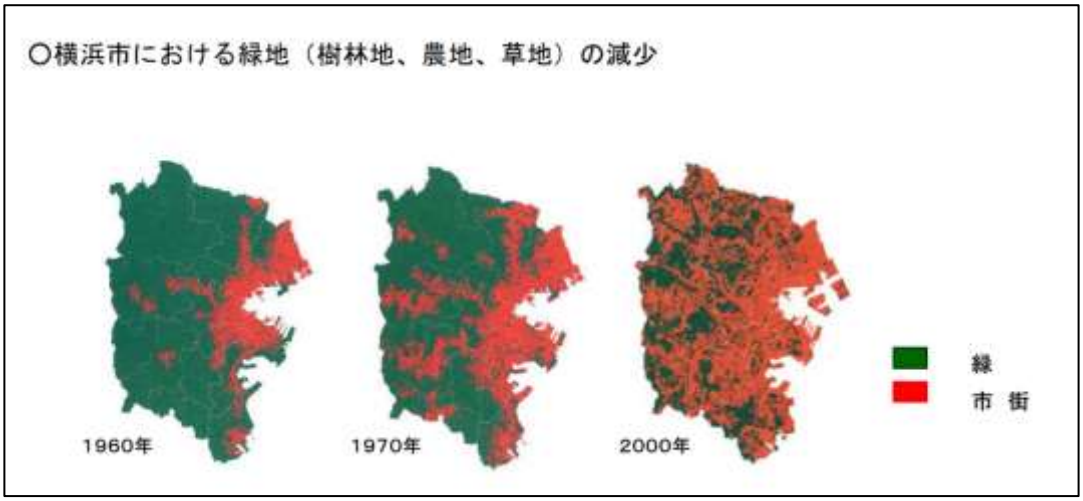
山崎圭一　横浜国立大学大学院国際社会科学研究院・教授
三ツ沢公園の自然と緑を守る会　呼びかけ人

大都市でゆたかに暮らす上で、緑（みどり）は欠かせません。横浜市にたくさん緑地が残っているのであれば、少しぐらい削って人工構造物をつくってもよいのですが、国土交通省の資料からとった下図でみるように、高度成長期以来どんどん減ってきて、今や残っている緑はきわめて希少です。1960 年～1999 年の 40 年間で約 7600 ヘクタールの樹林地が横浜市内で消滅しました。約 74%の消滅です。もうこれ以上、たとえ１平方メートルでも、横浜市の緑を、そして三ツ沢公園内の緑を減らしたくないと、私は感じています。

三ツ沢公園に残る緑は、とりわけ希少です。というのは、港湾部から離れた、比較的まだ緑地が残っている西部と違い、一番右端の図にみるように、ほとんど緑地が消滅した、港湾に近い東部エリア（または西部と東部の境界域）に残る緑だからです。昔は樹林地がおおかった横浜市では、どんどん市街化を進め、緑地を鉄とコンクリートの人工構造物に置換し続けてきましたが、もう十分ではないでしょうか。鉄とコンクリで投資をつづける工業化の時代は、かなり前に終わっています。

緑を守ることは、「都市の品格」を向上させることにつながります。「都市の品格」のことを「都市格」ともいいます。「都市格」は、第 19 代大阪府知事を務めた中川登氏（1875 年～1964 年）が、1925（大正 14）年の大阪での講演でテーマにした概念です。その後、大阪ガスの会長で、大阪商工会議所の会頭も務められた大西政文氏が、『都市格について 大阪を考える』（創元社刊）を 1995 年に刊行されました。人間も、所得水準が全てではなくて、人格が大事で、人格の高い人は結局金儲けも成功するのだと思うのですが、都市も GDP といった経済力だけでなく、「都市格」が大事で、「都市格」を高めれば経済力もついてくるように、感じます。横浜市内の残る緑地を１平方メートルも減らさず、今の緑地水準を厳格に維持しながら、その環境制約の枠内で必要な人工構造物を整備すべきです。サスティナブル・デヴェロップメント（持続可能な開発）の意味は、本来、そういうことです。横浜市内に新規に球技場をつくるな、というつもりは、ありません。市全体としての、かつ各地域コミュニティ内での、厳格な環境制約の枠内でのみ必要な整備を進めるのが、「環境の世紀」といわれる 21 世紀に見合ったまちづくりだと、私は考えます。

以下の図は、「みどりの政策の現状と課題（資料６）」という国土交通省の資料の２頁から引用。出所：
https://www.mlit.go.jp/singikai/infra/city_history/　city_planning/park_green/h18_1/images/shiryou06.pdf



以上

2023 年 11 月 28 日